

「水曜サロン with 赤堀会長」第6期 第6回(通算81回)

今「GIGAスクール」が目指すべきものとは

1. 内容

- GIGAスクール構想の立ち上げに関わった経験を元に、立ち上げ時の思い、現在の状況への憂慮、今後の展望について語られた。
- 学校はICTから大きく取り残されていた。堅固な基盤の構築、将来にわたり継続可能なコスト構造への誘導、ICT利活用の具体的な姿の学校現場への理解の3つを重視した。
- 生成AIの急速な進歩は立ち上げ時に想定していなかった。ただ生成AIに関心があって使っているのは最先端の学校だけで、ほとんどの学校はICTの便利さが実感できていない。また、ICT利用自体が目的化してまっており、デジタイゼーションに留まっている学校が多い。授業も従来の一斉授業のスタイルからの変革が進んでおらず、そういった学校現場が受け入れやすいICTサービスが展開され導入されていることが問題である。
- 個人情報に関するリスクや、国からの補助金頼みによる経費の手詰まりなど、現場での具体的な課題も多い。
- 教育論や指導法だけに目を向けていないかという問題意識がある。端末・通信インフラ・クラウドは堅固で持続的な状態にはなっていない。
- 企業・産業界は教育行政、学校現場とともに教育DX(デジタルトランスフォーメーション)を進めるための主役であるはずなのに存在感がない。
- 企業・産業界は「データ」ばかりで「人」が見えてない。業界内の同業者が見えていない。例えば学習eポータルへの接続は、経費負担や市場の囲い込みの問題から、新規企業の参入障壁になっている。これでは市場における求心力が働かない。
- 産業界、学校現場、行政、学术界、保護者、地域が協力し、エコシステム(生態系)を構築し、自立して存在できるようになる必要がある。

2. 所感

いわゆるファーストGIGAから5年が経とうとしているにもかかわらず、エコシステムができていない、という懸念(あるいは企業・産業界への苦言)を示されました。技術の発展のスピード感からすると、学校教育の変革スピードは決して速いとは言えません。そして企業は「先生方が『今』やりたい指導ができるように」という姿勢で教材を開発しているところが多いと思われますので、そのことも変化のスピードを加速させられない要因になっています。一方で多くの教育委員会において、アプリやシステムは5年契約で導入されており、企業の立場からすると2歩も3歩も現場の先を行くような製品を提案しても活用イメージの共感を得られず、向こう5年間採用の機会がない、というような事態は避けたくなるものです。

お話の中で「ビジネスモデル」という言葉も出てきましたが、5年契約ではなく、1年契約あるいはサブスクリプションのような形での調達が主流になれば、変化は加速していくのではないかと感じました。ただし、調達における透明性の確保をどうするか、毎年仕様書を書いて入札やプロポーザルを実施するのは現実的ではないと思います。学校で紙教材を毎年検討して採用するメーカーを決めるようなサイクルが行政(教育委員会)においてもできる方法を編み出す必要があるように感じまし

た。加えて、データの継続性も担保される必要があります。大きな課題ですが、子どもたちの未来のために変えていかなければならないポイントを気づかせていただきました。高谷様、ありがとうございました。